

「葉隠に見る検査道」

－武士道とは死ぬことと見つけたり－

百 田 浩 志 (第64回日本医学検査学会 学会長/社会福祉法人 済生会唐津病院)

二代佐賀藩主鍋島光茂時代の藩士である山本常朝が
武道書『葉隠』を示した。これは執筆したというより
山本常朝を慕う若い藩士がその語るところを記した、
いわゆる見聞録と言われている。『葉隠』に示された
多くの教えの中の「武士道といふは、死ぬことと見付
けたり」と言う一節は、誰もが一度は耳にした事がある
のではないだろうか。

もちろんこれを言葉通りにとらえては、佐賀藩に優
秀な武士は生き残れないことになり、あり得ない。し
かし、昭和の時代にこの一節を引用、いやあえて誤用
した二つの事象がある。ひとつは、第二次世界大戦
終盤に戦闘機ごと敵戦艦に突っ込む神風特攻隊であ
る。前途有望な若者たちに、死の恐怖より愛国心を向
上させるには、あまりに有効な言葉であったのではな

いだろうか。もう一つは、自衛隊総監を人質にし、自
衛隊にクーデターを呼びかけた後自決した、三島由紀
夫事件である。しかし三島は前述の特攻隊とはちがひ、
『葉隠』に精通し常に机上に置いていた。今回の私の
講演も、一部は三島由紀夫の書より引用させてもらっ
ている。

「武士道といふは、死ぬことと見付けたり」の意味
は『葉隠』を知るにつれ、「二つの道で迷った場合は
困難な方を選択しろ」「いつ自分がいなくなっても、
周囲が困らぬような手立てをしておけ」「何に対しても
死に物狂いで立ち向かえ」などと読み取れる。

今回は山本常朝の教えが、これからの検査道の標と
なることを、『葉隠』の哲学を引用しながら紹介する。